

禅籍の英訳について ——『正法眼蔵』を中心として——

山 浦 歩

0. 問題の所在 本稿は、禅籍の英訳の際にいかなる注意を払って取り組まなければならないかについて論ずるものである。『正法眼蔵』という書は、既存の仏教語や禅語に対して、道元禅師（1200～1253）が正伝の仏法の立場から独特な解釈を加えていることを特徴とする。これは他の禅籍と比べて大きく異なる点であり、その英訳において特に注意しなければならない所であろう。このような『正法眼蔵』の性格を踏まえながら、今回は原典の解釈と訳の表現という2つの作業の注意点について「葛藤」と「二枚」という用語を例に考察を行ってみたい。

1. 『正法眼蔵』英訳史 具体的な英訳テキストの考察に入る前に、まず『正法眼蔵』の翻訳の方法が過去50年で大きく変化したこと、また Soto Zen Text Project（以下、SZTP）を中心とした現在の翻訳の状況について触れておきたい。

1960～70年代にかけて、鈴木俊隆師が創立したサンフランシスコ系の禅センターを始め、多くの禅センターや寺院が北米に開設された。仏典や宗典の翻訳は、各禅センターや寺院がそれぞれ独自で行い、そうした中で道元禅師の著作の翻訳は達意的なものが多く、また読者の原文の理解を助ける註記が不足していた為、道元禅師の教えを英語で理解するには十分な環境ではなかったことが問題点として挙げられる。

そうした問題に应运て発足したのが、SZTPであった。本プロジェクトは日本とアメリカの道元禅師の思想に精通する研究者と僧侶が協同して、『正法眼蔵』を始めとする道元禅師の著作の英訳を行うものである¹⁾。

このように各禅センターが独自に翻訳していた頃と比べて、SZTP発足後の『正法眼蔵』の翻訳状況は格段に改善されたと言ってよいだろう。これには、『正法眼蔵』に詳しい研究者と僧侶がチームとなって作業にあたったこと、それによってそれまでおざなりにされてきた原文の解釈の正確さが改善されたことが大きく関わっており、後にふれるように翻訳の概念そのものが変化したとも言える。

(18)

禅籍の英訳について（山 浦）

2. 「葛藤」巻の「葛藤」の語について 次に、テキストを通じて、『正法眼蔵』とその英訳を考察してみよう。「葛藤」巻では、釈尊から摩訶迦葉へ正法眼蔵のさとりが伝わり、それが28世代を渡って菩提達磨へとつながってきたことが冒頭で言われ、それに続けて道元禅師は以下のように説示を展開する。

おほよそ諸聖ともに、葛藤の根源を截断する参学に趣向すといへども、葛藤をもて葛藤をきるを截断といふ、と参学せず、葛藤をもて葛藤をまつふ、としらず、いかにいはんや葛藤をもて葛藤に嗣続することをしらんや。嗣法これ葛藤としれるまれなり、きけるものなし。道著せる、いまだあらず。証著せる、おほからんや。

（『道元禅師全集』1, pp. 416-417, 以下『全集』）

「葛藤」とは、通常「煩惱」のことである。特に仏法を学ぶ上での妨げになる言葉の冗長さや煩わしさを指すものとして捉えられている。最初の「葛藤の根源を截断する」や「葛藤をきる」といった箇所がそれに該当する。煩惱としての用例は、この「葛藤」巻の他、「山水経」巻や『弁道話』にも見られる。ところが「葛藤」巻では、ツタの絡まる様子を、師と弟子の一体なる様子に擬え、「嗣法」の意として捉えられている。この箇所について『正法眼蔵抄』が「解脱」として定義していく²⁾のに対して、晴山俊英氏は「（『正法眼蔵抄』は）最初から仏の視点で語義を規定していこうとするが、筆者はむしろ道元禅師は、煩惱という意味も含めながら説示していると考え、いわゆる掛詞的な印象で受けている」と述べ³⁾、嗣法の意である「葛藤」でさえもそこには煩惱の意味が含まれていると解釈している。筆者も、晴山氏同様に道元禅師は煩惱という意味を持たせながら葛藤を解釈していると考え、というのは、「山水経」巻や『弁道話』に従来の煩惱としての使用例がある以上、道元禅師が直接「嗣法」や「解脱」のような肯定的な意味に捉えていたとは考え難いからである。

次に、「葛藤」の英訳について考察してみよう。SZTPのCarl Bielefeldt氏は、先に見たように、同語に複数の語義があるにも関わらず、一貫して“twining vines”（絡み合うツル）という訳語を用いている。Tanahashi氏もBielefeldt氏と同じく“twining vines”⁴⁾という訳語を用いているが、最初の「葛藤」と「截断」に対する註記で“expressions”（表現）“fully comprehending”（完璧に理解すること）という補足説明をそれぞれ加えている。“expressions”は主に言葉による表現を指しているものと思われ、「言葉による思慮分別の働き」を“expressions”と説明して加えていると考える。さらに「截断」を“fully comprehending”と訳すことによって、葛藤という煩惱を脱して、真の仏法の理解に達したという、いわば「会得」のニュ

アンスを与える為にこの註を付したと考えられる。

以上のように見てくると，“twining vines”という訳は確かに曖昧ではあるが、従来の解釈と道元禅師の意味のどちらにも当てはまるものであり、Tanahashi 氏の訳に関しては註が非常に大きな役目を果たしていることが窺える。

3. 「一顆明珠」巻の「二枚」の語について 「一顆明珠」巻では、玄沙師備（835～908）と僧の「尽十方界，是一顆明珠」の問答に関して、道元禅師が僧と玄沙による質問とコメントに、それぞれ説示を展開していく。

まず、僧が「尽十方世界，是一顆明珠。学人如何会得。」⁵⁾（尽十方世界，是れ一顆明珠と言いますが、仏法を学ぶ人間はどのように理解すべきでしょうか。）という僧の問いに対して、玄沙が「用会作麼。」（理解してどうするのか。）と語り、知見解会によって一顆明珠を理解しようとする僧に解答を投げかける。次の日、玄沙は「来日却問其僧，尽十方世界，是一顆明珠，汝作麼生会。」と言って⁶⁾、僧に「一顆明珠」をどう理解したかを尋ねる。この箇所に対して道元禅師は「これは道取す、昨日説定法なる、今日二枚をかりて出氣す。今日説不定法なり、推倒昨日點頭笑なり。」（昨日は定法を説いたけれど、今日は二枚を借りて言う。今日は不定法を説くのだ。昨日を押し倒して、頷いて笑う。）との説明を加えている。

この「二枚」は昨日の「用会作麼」と今日の「作麼生会」のことで、昨日は定法、今日は不定法を説くというように別の言い方をしたと解釈がなされる。水野弥穂子氏はこの「二枚」を唇として解釈をしており⁷⁾、その解釈を受けた Charles Muller 氏は “Today he uses his own two lips to speak.”（今日、二つの唇を使って話す）と訳している⁸⁾。

「枚」というのは、例えば『正法眼蔵』の「摩訶般若波羅密」巻における「五蘊は色・受・想・行・識なり、五枚の般若なり。」⁹⁾や「画餅」巻における「従来の一枚・二枚の臭皮袋」¹⁰⁾といった用例が示すように、人や物を数える時に用いられ、「唇」の意味での用例は見当たらない。ここでは玄沙の昨日の「用会作麼」と今日の「作麼生会」を指していると解釈するのが適当だろう。

そうした解釈に沿って、Tanahashi 氏は “adding another layer” と訳している¹¹⁾。これは直訳すると「別の層を加える」になるが、玄沙が今日に別の言い方で「明珠」という本質を表現したことを訳したものであろう。おそらく「枚」を紙等の何か薄いもののようにつまえて、“layer” と訳したと考えられる。

4. まとめ 『正法眼蔵』の翻訳状況に関しては、SZTP 発足以後を中心に過去 50 年で大きな変化が見られる。つまり、原文をわかりやすく、咀嚼して伝える

(20)

禅籍の英訳について（山 浦）

訳文重視の姿勢から、日本人が『正法眼蔵』を読む時に感じる難解さ、不可解さをそのまま英語で伝える原文重視のスタイルへの変化である。その中で、訳の表現という点では、「葛藤」の“twining vines”のように従来の語義と道元禅師における語義のいずれもカバー出来る、広がりのある訳を意識しなければならないが、同時にそれは曖昧となることによって道元禅師の意図する所がかえって明確に伝わらなくなるということにも留意しなければならない。原文の解釈においては、「二枚」のように複数の解釈が可能な場合の対処として、該当箇所解釈が絶対的ではなく、推測にすぎないことを説明する註記の役割が重要になってくる。

翻訳においては、まず意識か直訳かといったことに目が行きがちだが、そういった議論も原典の正確な解釈を何よりも優先させて作業が行なわれなければならないと考える。

1) <http://scbs.stanford.edu/sztp3/>.

2) 『永平正法眼蔵菟書大成』13, p. 131.

3) 「道元禅師における皮肉骨髓について」『印度学仏教学研究』第46巻1号, 1997, p. 92.

4) *Treasury of the True Dharma Eye—Zen Master Dogen's Shobo Genzo* (Boston: Shambhala, 2010), pp. 478–479.

5) 『全集』1, p. 77.

6) 同, p. 79.

7) 『原文対照現代語訳道元禅師全集』1 (春秋社, 2002), p. 219.

8) <http://www.acmuller.net/dogen/onebrightpearl.html>.

9) 『全集』1, p. 5.

10) 同, p. 269.

11) *Treasury of the True Dharma Eye*, p. 36.

〈キーワード〉 道元, 『正法眼蔵』, 仏典英訳

(駒澤大学大学院)